

Viva! ヨーロッパ



フランス



演奏、バザー…支援の心 被災者に届け

パリで東日本大震災の被災者を支援するチャリティー・コンサートやバザーが盛んだ。日本人の異境での祖国への熱い思いとフランス人らの日本への「支援と連帯」の心が結実したものだけに、通常とは異なった内容になっている。

緊急オーケストラ

「熱い心で200%の出来」と演奏後、大感激だったのは、10日パリの国連教育科学文化機関（ユネスコ）本部で行われたチャリティー・コンサートで武満徹さんの「弦楽のためのレクイエム」やドボルザークの交響曲「新世界」などを指揮した阿部加奈子さん（大阪府出身）。

出演者は阿部さんの出身校、パリ国立高等音楽院の学生で昨年のジュネーブ国際音楽コンクールの優勝者のピアニスト、萩原麻未さん（24）＝広島市出身＝ら音楽院の学生や卒業生、パリ・オペラ座のオーケストラのメンバーなど約120人。大震災の惨状に、「音楽家として何かできることをしよう」と友人やフェイスブックで呼びかけあって参集した緊急オーケストラだったが、阿部さんをはじめ一同の熱演で会場は割れるような拍手に包まれた。

入場料は無料で、会場で募った義援金は2万1374.93計（約255万円）集まった。

巨匠たちが熱演、熱唱

アルゼンチン出身の世界的ピアニストのマルタ・アルゲリッチさん（69）主導の「日本支援コンサート ころろ」は9日にパリ市内で行われ、イスラエルの88歳のバイオリニスト、イブリー・ギトリスさんや日本の代表的ピアニスト、海老彰子さん（57）らが競演。アルゲリッチさんと若手の酒井茜さん（34）の連弾などチャリティーならではのプログラムだった。税込み入場料が75計、380席が満席で約2万8000計（約334万円）が寄付



被災地支援コンサートで「故郷（ふるさと）」を日本語で合唱するジェーン・パーキンさん（右から3人目）ら出演者たち＝11日、パリ（共同）

された。

パリのショービジネスの居城、ロンボワン・デ・シャンゼリゼ劇場では11日に「ツナミと明日」と銘打った被災地支援コンサートが開かれた。アダモさん（67）が代表作「雪が降る」を日本語で熱唱したほか、仏映画「男と女」などの映画音楽の雄、フランシス・レイさん（78）がアコーディオンを演奏。日本への支援旅行から帰国した直後のジェーン・パーキンさん（64）も駆けつけた。税込み37計の入場料で800席が満席。経費を差し引き、会場の寄付金などを加えた2万8400計（約338万円）の義援金が集まった。

仙台出身の佐藤さんも

被災地、仙台市出身の指揮者、佐藤俊太郎さん（38）は15日にサンジェルマン・デ・プレ教会で指揮。荘厳なサムエル・バーバーの「弦楽のためのアダージョ」が教会の高い天井に響き、聴衆を感動させた。入場料20計で650席がほぼ満席。会場での募金も加えて1万256計（約122万円）を寄付した。

一方、17日に早稲田、慶応、上智の3大学主催のチャリティー・バザーがポルト・ド・バンセンヌのノミの市の一角で行われた。浴衣や瀬戸物など日本製品が



早稲田、慶応、上智の3大学が主催した被災地支援のチャリティー・バザー＝17日、パリ（山口昌子撮影）



日本語で代表曲の「雪が降る」を熱唱するアダモさん＝11日、パリ（©Sumiyo Ida）

人気を呼び、売り上げ金が6100計、義援金も2890計の計8990計（約107万円）が集まった。

パリ日本人会の義援金募集は大震災発生直後から開始。2週間で約220万円が集まり、「今後、1年は続ける」（事務局）と張り切っている。

寄付金は全て日本赤十字を通じて被災地に送られる。（パリ 山口昌子）



日本支援のため、マルタ・アルゲリッチさん（左から2人目）と珍しく競演した88歳のイスラエルのバイオリニスト、イブリー・ギトリスさん（中央）＝9日、パリ（山口昌子撮影）

ひと

ソングレターアーティスト 安達充さん

「恥ずかしくて言いつらいことや、面と向かっては言えない思いも、歌にすれば伝えられる。ソングレターは、ある人の思いをある人に伝えるために作る歌なんです」

作曲は中学のころ独学で学んだ。友達への思いや悩みに共感するたびに曲を作り贈っていたという。大学卒業後、サラリーマンや工場労働者などを経て2004年、音楽活動を開始。リストカット経験をつづった少女の日記にネット上で触れ、自作の曲を贈ったのを機に、ソングレター

アーティストとしての活動を始めた。

「一番多い依頼は、結婚式で両親に宛てた感謝の曲。出産前のおなかの子宛てや、自分への応援歌をという人、プロポーズに使った人もいました。プロポーズはうまくいきましたよ」

曲作りは依頼者の思いをじっくり聴くことから始める。詞も曲も自作だが、難しいのは作詞。「2週間ぐらい頭がいっぱいということもある。一方、話を聴いて心の琴線に触れることがあります。依頼者が心からそう思っていると感じられ

ると、後は早いんです」

05年に福岡県飯塚市の小学5年の子を持つ母親から、性教育の授業用に曲の依頼があった。「歌にすれば命の大切さが伝わりやすい」との思いだった。できた「僕が生まれた時のこと」はネットで「泣ける曲」と話題に。

曲は今では小中学校の卒業式や教育現場の教材として広まっている。詞に絵を付けた同名の絵本（プレジデント社）もこのほど、刊行された。千葉県出身の32歳。

